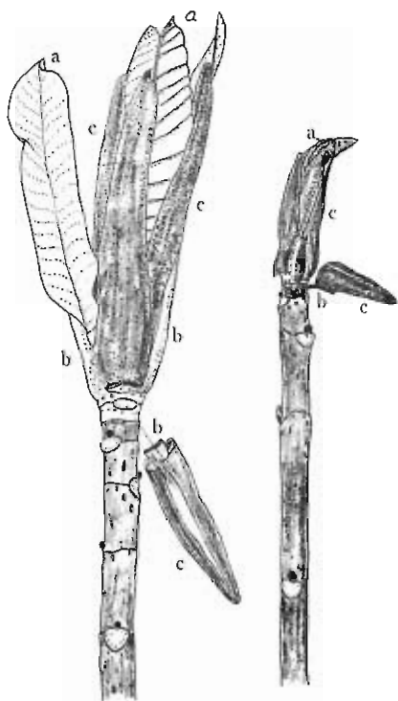


樹木だより

ほおのきの開葉



a. 葉身, b. 葉柄, c. 托葉

冬枯れの樹木の梢には、小さな木の芽たちが温い芽鱗に包まれて、半年もの長い間、じっと春を待っている。そして、春来たるや、樹々の梢は一度ににぎわい始め、それぞれの樹種に固有の古い衣のぬぎ捨てをする。北海道の広葉樹の中で、最も冬芽の大きい、誰にでも見分けられる樹種の1つがホオノキである。その革質の、帽子のような、暗褐色をした、最も外側の芽鱗がはがれると、内にうす桃色の芽鱗が現われ、次に黄緑色の葉(葉身)が顔をのぞかせる。そうして開葉しつつ各々の葉は大きくなり、節間(葉と葉の間)も広がってゆく。春の温い日射しに冬芽がほぐれつつ、小さな緑の葉が次々と現われる様子は、この日を待っていた生命の躍動を感じさせ、何とも言えぬほのぼのとした思いにさせられる。

雨あがり遅い芽立ちも山の春 宵山

なお、図のように、ホオノキの芽鱗は2枚の托葉の癒合で構成されていて、葉柄が托葉を枝条に固定し、葉身は未発達である。わが国の歌人たちは開葉を、芽吹き、芽立ちと歌っている。ふつう言われる「発芽」は種子からの場合に、「新芽」は地下から地表に現われた多年草の場合に適用される言葉であろう。そして、冬芽の場合には「開葉」という言葉が適切と考えられる。なぜなら、芽鱗の内には、すでに葉が形成されているのであるから。ともかく、樹々の芽成ちは北国に住むわれわれに春が本物であることを教えてくれる。私にとって、その時が1年中最も楽しい季節である。(斎藤新一郎)

